わが国先物取引

WTO農業協定の成立を背景として、農業貿易の自由化や農産物市場における市場原理の徹底化が進む中で、農産物の価格変動もまた激化する可能性を持つに至った。価格変動の激化は農産物生産者の経営にとってリスク要因となりうるが、そのリスクを回避するための方法の一つとして、わが国の農産物先物取引の可能性を探る、というのが本書の課題である。

わが国における農産物先物取引の歴史は古く、江戸時代にはすでに大阪堂島でコメの先物取引が行われている。そうした古い歴史を持つているとはいえ、近年に至るまでのわが国の農産物先物取引は限られた品目を対象としたものでしかなかった。その理由は、農政サイドから多様な価格安定対策が講じられたり、また、流通課程において種々の価格安定をはかる工夫がなされてきたために、農産物生産者が先物取引を利用してリスク回避をはかる必要性が乏しかったからである。しかし、WTO体制のもとでの価格変動の激化を前提に、リスク・ヘッジ機能、価格安定機能を持つ先物取引が浮上する可能性が現れ始めたのである。

『国内農産物の先物取引』

リスク管理手法としての可能性

農林中金総合研究所編(家の光協会)

本書は、農産物先物取引の仕組み・機能を解説した第一章、わが国の商品先物取引所に上場されている品目のうち五品目(ブローラー、鶏卵、ジャガイモ、輸入トウモロコシ、コーヒー生豆)を取り上げて個別具体的な検討を加えた第二章、アメリカにおける先物取引の仕組みと現状を紹介した第三章、そしてわが国の農産物をめぐるリスク管理と先物取引の可能性を論じた第四章、によって構成されているが、とくに本書の課題に関わる核心部分は第二章である。第二章において、品目ごとの需給関係、

現物市場の状況、リスク状況等についての詳細な分析を行ったうえで、本書は、現状では日本の先物市場は未成熟で、先物取引の利用はかなり限定的である、との結論を与えている。その主たる理由は、先物取引を必要としないわが国の生産・流通構造や、基金方式を中心とした日本型リスク管理が存在しているためである。しかし、本書は、先物取引をリスク管理の一手法として位置づけ、その制度的な改善が重要であるとも論じて、結論部分を締め括っている。詳細な分析を通じて得られたその結論に

対して異論はない。だが、本書を読み終わって、少々気になった点がある。第二章で取り上げられた上場品目のうち四品目は、いずれも近年の「新商品の上場ラッシュ」において登場した先物商品である。「上場ラッシュ」が生じた原因は、直接的には近年の商品取引所法の改正によるものである。が、しかし、第二章の著者も指摘するように、本質的には農業の世界に押し寄せる市場原理主義、そしてその一環としての規制緩和政策である。だとすると、日本型リスク管理がそれなりに機能しているにもかかわらず、規制緩和政策がそれを打ち壊し、リスクを拡大させつつあるという現実を前に、農業を取り巻くリスク管理のあり方の是非を問いつつ、という作業が、いまいち必要ではなかるうか。気になった点は

はそれである。とはいえ、第二章は各品目の生産・流通の現状に関する詳細な情報を与えてくれているし、また、第一章および第三章は、初心者にはなかなか理解しがたい、複雑で多様な先物取引の仕組み・機能を比較的確りやすく解説してくれている。一読をお薦めしたい。

(二〇〇二年四月、二七頁、一、六〇〇円)

(東京農業大学国際食料情報学部)

教授 應和邦昭)